最後の輪廻

余田史子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の輪廻

【Nコード】

N6331Y

【作者名】

余田史子

【あらすじ】

誰かから私は逃げていた。でも、何も覚えていない。気がつくときは記憶を失っていた。誰から逃げていたの？そして、目の前に現れた男の人は、いったい誰？！サスペンスのような、SFのような、恋愛小説、お楽しみください。

第1話 記憶喪失

私は逃げていた。オフィスビルの立ち並ぶ夜の街を。
必死で逃げていた…。

殺される。

逃げないと…。

早く、ここから逃げないと…。

必死で私は走っていた。

誰か、助けて！でも、誰に助けを求めていいかもわからないまま、
ただひたすら走っていた。

夜の街は静かだった。辺りには私の足音しか聞こえない。休日の
オフィス街の夜。どのビルも明かりが消え、閑散としている。

はあ。はあ。

息が切れ、足はパンパンだった。

もう走れない。そんな余力もない。喉はカラカラで、心臓はバク
バクだ。

はあ。はあ。

無意識に私は上着のポケットに手を入れた。そこには、なぜか飴
玉が入っていた。

私は飴の包みを震える手でどうにかあけ、飴を口に放り込んだ。

それからまた、歩き出した。

一步、また一步。壁に手を当て、どうにか前に進んだ。

足の裏がじんじんとしびれ、もう一步も歩けないくらいになって

いる。それでも私は歩いた。

はあ。苦しい。でも止まれない。きつと追って来る。私を殺すまで追って来る…。

私は気がつくど、高層マンションが立ち並ぶ街の中にいた。街燈がいくつもあるが、外には誰の姿も見当たらなかった。

腕時計を見ると、9時を過ぎていた。ここの住人達はすでに、みんな家の中に入っているのか。

カッソ…。カッソ…。

私の靴の音がやたらと当たりに響くので、私はそこで靴を脱いだ。パンプスを拾い上げ、上着のポケットに押し込み、また私は歩き出した。

高層マンションを見上げた。いったい、何階まであるのだろうか。どのマンションもものすごく高い。

見上げたマンションの上に夜空が広がっているが、ただただ真黒なだけで、星も月も出ていなかった。

あたりはすごく静かだった。人の声も、車の音も、なにも聞こえない。

夜は一気に冷え込むのか、吐く息が白かった。

風は全く吹いていなくて、ただその辺りを包む空気がやたらと冷たく感じた。

カッソ…。

その時、静けさの中に靴の音が鳴り響いた。

ドキ！誰かいる。

パンプスの音ではなく、男物の靴の音だ。それも聞き覚えがある。私はゾクツと寒気を感じた。あの男だ！

また私は走り出した。

必死で走り、すぐ近くの高層マンションの門をくぐった。

エントランスの自動ドアが開いてくれるかどうか、ものすごく不安だった。

ピカピカに磨かれた大きなガラスの自動ドア。その前に立つと、自動ドアはスウツと静かな音を立て開いてくれた。

良かった。胸をなでおろし、マンションのロビーに入った。広々としたロビーは大理石できていた。床は私の影をしっかりと映すくらい、綺麗に磨かれている。

煌々と明かりのついたロビーには、黒い革張りのソファアが置かれていた。ああ、座りたい。でも、休んでなんていられない。

ロビーの奥へと足を進めると、管理人室があった。だがその中は真っ暗だった。

私はロビーからマンションの廊下へと、必死で向かった。

はあ、はあ…。

息が切れる。足の裏が痛い。そして大理石の床は冷たかった。

それでも必死で私は足を動かした。

その時、靴が私の上着のポケットから落っこちた。慌てて拾おうとしたが、エントランスの前を人影が動いたので、私は慌てて身を

隠した。

ドキン。ドキン。

お願い。こっちにこないで！

人影はエントランスの前から消えた。

良かった！気づかれずに済んだ。

また私は歩き出した。

まっすぐに続くマンションの廊下を、ただひたすら前に進んだ。

廊下は電気がついていて明るかった。だが、どの部屋も明かりが漏れている部屋はなく、真っ暗だ。

そのうえ、あたりは静まり返っていた。聞こえてくるのは、私の「はあ、はあ」という息の漏れる音だけだ。

「あ…」

私は一つだけ、微かに窓から漏れる明かりを見つけた。あそこに誰かがいるかもしれない。

助けを求められるかもしれないと、ひたすら祈る気持ちで私はその部屋へと必死で歩いて行った。

助けを求めたら、警察に連絡してくれるかもしれない。そしてあいつを捕まえてもらって…。

でも、あいつって、誰？

それに、なんで私はここにいるの？

そして、ここはいったいどこなの？

…私は、いつたい、誰なの…？。

ドアのチャイムを鳴らそうとしてから、私の指は止まった。殺される。逃げないと殺される。だけど、いったい誰から私は逃げているの？

どうして？なんで覚えていないの？

何も、何も私は覚えていない！いったい、どうして？！

ピンポン…。震える指でチャイムを押した。だけど、返答はなかった。

「すみません。誰かいませんか？」

私はドアを静かに叩いた。あんまり大きな音を立てて、あいつに聞こえたらここにいるのがばれてしまう。

だけど、あいつって誰なの？なんで私は追われていて、どうして何も覚えていないの？

誰も出てくる気配がなくて、私はそっとドアノブを掴んでみた。ガチャリ。ドアノブが動いた。鍵はかかっていたいなかった。

そっとドアを開け、中を覗いた。

玄関の床はやはり大理石でできている。そこには一つも靴がなく、中はしんと静まり返っている。だけど、電気だけが煌々とついている。

「誰かいませんか？」

小声で聞いた。だが、やはり返答はなかった。

ゾク…。誰もいないんだ。ここ、無人なんだ。

背筋がゾツとしてきて、私はドアを閉めた。

このマンション、そういえばすごく綺麗だ。まだ建ったばかりのマンションかもしれない。だとしたら、ここには住人はいないのかもしれない。

私はまた廊下を歩いた。いったい、これからどうしたらいいのだろう。

マンションの一階の奥まで歩き、行き止まりで私は止まった。

ここから出たら、またあいつに出くわしてしまうかもしれない。

ここにいても、いつか見つかってしまうかもしれない。

だけど、闇雲に歩き回っているよりもまだ。

さっきの部屋に戻るのか。あそこならドアが開いていた。中に入って鍵をかけ、電気を消して静かにしていたら、見つからずにすむんじゃないのか。

シュー…。

微かにエントランスの自動ドアが開いた音がした。

ドキン。まさか、あいつ？

カッーン。カッーン。

男物の靴音が廊下に響いた。

あいつだ。こっちに来る！

ああ。あれだ。ポケットから落ちた私のパンプス。あれを見つけってしまったんだ。取りに戻ればよかった。だが、それも後の祭りだ。

私はその場から、影になっている廊下の溝へと移動した。もう隠

れるところはそこしかなかった。

ドキン。ドキン。ドキン。

心臓がどンドン、早く鳴りだした。

カッーン…。

カッーン…。

どンドン、足音は大きくなっていく。

ああ…。なんで私は追われているんだろう。いったい、相手はどんなやつなんだろう。

なんで何も覚えていないんだろう。覚えているのは、ただ追われているという恐怖感だけだ。

私はもつと奥へと身を隠した。廊下は明るかったが、そのくぼみは影になっていて、じっとしていたら、見つからないかもしれないなかつた。

ゴツ…。

何かが後ろの壁に当たった。私のスカートのポケットの中に何かがある。私は音をたてないように、静かにポケットからそれを出した。

ナイフ？折り返み式の果物ナイフだ。なんで、こんなものが。

用心のために持っていたのだろうか。私はナイフを開き、両手でギョツと握った。手はぶるぶると震え、唇までが震えだした。

寒かった。歯がガタガタ言うのだけは、必死で押さえた。

だが、手が震えるのは寒さだけではなかった。殺される前に、これで相手を刺そう。そう思うと、怖くて手が震えてくるのだ。

こんなナイフがいったい、何の役に立つんだろうか。わからないでも、刺して逃げだすことはできるかもしれない。

だけど、これ以上私は走れるのだろうか。足の裏は擦り剥けているし、寒さでかじかんでもいる。

カツーン！

カツーン！

足音がどんどん近づいてくる。

はあ……。恐怖で息が漏れた。

いけない！吐いた息が私を隠していた闇の中で、白くうずまいている。

「誰？」

男の声がした。

「誰がいるの？」

カツン。カツン。

足音が早くなり、どんどんこっちに近づいてくる。

ガタガタ。ナイフを持っている手が震える。

このまま勢いよく飛び出して、心臓めがけてナイフで刺そうか。

だけど、足が動かない。しゃがみこんだまましびれてしまい、足がどうにも動かない。

「そこに誰がいるの？」

来た！もう逃げられない！

「君、この靴の持ち主？」
男の手には私のパンプスがあった。

「どうしてこんなところにいるの？隠れているの？」
え？

「誰かに追われているの？」
……。私を殺しに来たやつじゃないの？

「この靴、君のじゃないの？」
私の……」

「立てる？」
その人は私の前にしゃがんだ。私は警戒して、後ろの壁にひっついた。

「……それ、危ないよ」
私の手に持っているナイフを見て、その人はそう言った。

ガタガタ……。私の手はまだ震えていた。
「わ、私を追って来たんじゃないの？」

「僕？いや、違うよ」
「……じゃ、じゃあ、あなた誰？」
「……君は？」

「私は……」
覚えていない。まったく、覚えていない。

この人の顔も覚えていない。でも、なんでだからわからないけど、この瞳は覚えがある。なぜだか、懐かしくて、あったかい優しい瞳だ。

「はい。靴、履いたほうがいいよ」

「…あ」

両手は固まり、ナイフをなかなか離せないでいると、その人が私の指からナイフを取ってくれた。

「危ないから閉まっておくね」

ナイフを折り畳み、その人は自分のポケットにナイフをしまった。それから、私の両腕をつかんで、立たせてくれた。

ふらふらしながら私は立ち上がり、どうにか靴を履いた。

「大丈夫？歩けそう？」

こっくりと、私はうなづいた。

「寒そうだね。これ、着たらいいよ」

その人は自分の上着を脱いで、私の肩にかけてくれた。そして私の肩を抱いて、ゆっくりと歩き出した。

「あなた、ここに住んでいる人ですか？」

「いや。違つよ」

「…じゃ、じゃあ、ここってどこか知っていますか？」

「…さあ」

え？

「それが、まったくわからないんだ」

男の人はまっすぐ前を向いて答えた。

「ここがどこか？」

「うん」

カッーン。カッーン。

その人の足音と私の足音が、廊下に鳴り響いた。他には何の音もないから、靴音だけが響き渡ってしまう。

「靴音を聞いて、あいつが来たらどうしよう」

「誰？」

「私を殺そうとした人……」

「殺しに？そんな危ない奴から逃げてたの？」

「……」

私は黙ってうなづいた。

「誰なの、そいつ」

「わからない」

「え？」

「わからないんです」

「何をして殺されそうになっているの？」

「それも、わからないの……」

その人は目を細めて私を見た。そして、下を向きたため息をついた。その人からも真っ白い息が漏れた。

「君もなんだね」

「え？」

「実は僕も……。記憶が全くない」

「え?!」

「なんでここに居るのかも。自分が誰なのかも……」

どういつことなの? 2人して記憶がないなんて……。

第2話 戦国時代の記憶

「いったい、ここはどこなんだろう。この高層マンションには人はいないのか…」

男の人はそう言つと、また私を抱え、ゆっくりと廊下を進んだ。

「あそのこの部屋だけ、電気がついてるね」
私がさつき、ドアを開けた部屋をその人は指差した。

「あの部屋、ドアに鍵もかかっていなかったの」

「え？」

「さつき、開けてみたの。玄関には靴もなくって、人の気配もしなかった」

「誰もいなかったの？」

「多分。なんだか、怖くて中には入らなかったから、わからないけど」

「そっか」

その人はゆっくりとその部屋へと進み、

「でも、開いてるのがここだけなら、とりあえずここで寒さをしのごうか」

とその部屋のドアを開けた。

ドアを開けると、やっぱり玄関には靴もなく、部屋の中は煌々と電気だけがついていた。

「本当に誰もいないみたいだね」

その人はそう言つて、靴を脱いだ。それから、私が靴を脱ぐのを待って一緒に中に入った。

「こっちはリビングだ」

玄関からすぐのドアを開け、その人が中を覗いでそう言った。

「ソファもある。座らない？立っているのもやっつとでしょ？」

「うん」

その人に抱えられ、私はソファまで歩いて行き、ソファに座った。真っ黒の皮のソファはすごく柔らかく、私の体はソファに思い切り沈みこんだ。

ソファの前には透明なガラスのテーブルがあり、その上には何も置いていなかった。

ゆっくりと私は部屋を見回した。大きな窓にはブラインドがかかっていた。

部屋の隅には大きな観葉植物が置いてあり、天井には綺麗なシャンデリアが下がっていて、淡い暖色の光がリビング全体を照らしている。

リビングからダイニングもキッチンもつながっていて、ダイニングテーブルも黒く、椅子も黒かった。そしてやっぱり、ダイニングテーブルの上にも何も、置かれていなかった。

黒の家具だからか、壁の白さがやけに目立った。壁には一つだけ絵が飾られていたが、その絵の中には高層マンションが描かれていた。多分、このマンションの絵だろう。

「人が住んでいる感じじゃないね。ああ、あれだ。まるでモデルル

「ムだ」

男の人がそう言った。

私はようやく落ち着いてきて、その男の人の顔を見ることができた。黒い短い髪に、黒い瞳。顔はとても整っている。

「私たち、どこかで会ったことがあるのかな」

「え？」

「なんだか、見覚えがある気がするの」

「……」

その人も、私のことをじっと見た。

「君もそう感じてた？」

「あなたも？」

「うん。不思議と懐かしい。それに……」

「……？」

しばらくその人は、私を懐かしそうに見てから、

「僕がここにいるのは、君を守りに来たっていう気がしてならないんだ」

と話を続けた。

「守りに……？」

「なんで僕はここにいるのか。この街の中を歩きながらすごく不思議に思っていた。記憶がなくなったとしても、何か意味があっここにいるんじゃないのかって」

「……」

そんなことを考えながら歩いていたの？

「それで君を見つけて、なんとなくだけど、君を守るために僕はここに来たんじゃないかって、そんな気がしたんだ」

「…守るために？」

「そんな感じが君はしない？」

「私はよくわからない。でも、あなたのことを見て、やっぱり懐かしく感じた」

「僕と君は、知り合いだったのかな」

「…さあ」

その人は自分のズボンのポケットに手を入れて、中に入っていたものを取り出した。

「何か手がかりはないかと思って、さっきも上着やズボンのポケットの中を探したんだ。それで出てきたものは、この飴一個と、飴を包んでいた紙だけだったんだ」

その人はポケットから、飴玉と包み紙を取り出して、私に見せてくれた。

私も立ち上がり、自分のポケットの中を探った。

「あ…」

ポケットからはやっぱり、一個の飴玉と、包み紙が出てきた。

「おんなじ飴と、包み紙だ」

その人はそれを見て、そうつぶやいた。

「偶然？それとも、これにも何か意味があるの？」

「さあ、わからないけど、一つだけわかっているのは、あとは何にも手がかりがないってことだ」

「それと私が持っていたのは、果物ナイフよ」

「ああ。そうだったね。あとはポケットには何も入っていない？」

「ないわ。なんにも…」

私はまたソファに座った。

男の人は、キッチンに入って行った。そして冷蔵庫を開けたり、食器棚を開けたりしている。

「冷蔵庫、何にも入っていないよ」

「そう…」

それからその人はシンクの前に立ち、水道の蛇口をひねった。すると水がそこから、ジャー…と勢いよく流れだした。

「水は出るんだね」

そう言っ、食器棚からコップを出して、その人は水を汲んでゴクゴクと飲んだ。

「うん。けっこう冷たいしうまい」

「私にもくれる？」

「ああ、持って行くよ」

新しくコップを出し、水を汲んでその人は、私の所に持ってきてくれた。

ゴクン…。本当だ。美味しい。

「はあ…」

やっと、生き返った気がする。

「玄関のドア、鍵を閉めてチェーンをかけてくるよ」

「うん」

その人がリビングから出て行ってから、私はしばらくソファの背もたれにぐったりともたれかかり、休んでいた。

ジャー……。水が勢いよく流れ落ちる音がする。ああ、もしかするとお風呂にお湯をためているのかもしれない。

その音を聞きながら、私はそのまま眠りについてしまったようだった。

ふわ……。体が一瞬間に浮いた。なんだろう。すごく気持ちがいい。そしてフワフワした雲の上に、乗った。

ここはどこだろう。

誰かの声が聞こえた。

「姫！」

ひめ？ひめって、姫のこと？

「姫……！」

叫び声は大きくなったり、小さくなったりしながら消えて行った。辺りには焼ける匂いや、煙が一面に広がり、息ができないくらいに苦しくなり、そして目が覚めた。

「ここは？」

フワフワしていたのはベッドだ。なんで私はベッドに寝ているのだろう。

ベッドの横のスタンドの、小さな電球だけが明かりを灯し、あとの電気は消えていた。

「そつだ。高層マンションの中だ。あの人と一緒に部屋に入って、

それから？」

私は布団をめぐつた。上着は脱いでいたが、ブラウスとスカートはちゃんと着ていた。

「そうだ。私、ソファでうたたねをして…」

もしかすると、あの人がここに運んでくれたの？

そつと私は部屋を出て、リビングに行った。リビングの明かりも消え真つ暗だし、ソファにも誰もいなかった。

リビングを出て、今いた部屋に戻りかけ、奥にもう一つ部屋があることに気がついた。

もしかして、あの人はここにいるのかしら。

トン…。小さくノックをした。返事はない。

私はそつとドアを開けてみた。

私が寝ていたようなベッドが置いてあり、その横のテーブルには、やはりスタンドが置いてあった。その小さな電球だけを灯し、ベッドにあの人がすやすやと寝ている姿が見えた。

「寝てる…」

私はちよつと安心した。彼が寝ているからじゃない。彼がここにちゃんといてくれたからだ。

ここで、彼に置いて行かれたら、私は一人で記憶もなくし、どこへ行ったらいいかも、何をしたいかもわからない。

それに、あの男に見つかってしまったら…。

また、もといた部屋に私は戻った。クローゼットを開けると、バ

スローブがかかってあり、私は服を脱いで、それに着替えた。
それからバスルームに行き中を覗くと、まだバスタブにはお湯が
はられたままだった。

「ガス、通ってるんだ」

私はお風呂のお湯を、また沸かしなおした。

その間体を洗い、髪を洗った。

そしてバスタブに入り、ゆったりとお湯につかった。

「ああ、生き返る」

体がやつと、あったまっていくな感じがした。

「それにしても、あの夢、なんだったのかしら。姫って呼ばれてた。
それになんとなく、昔の城の中みたいだった。大阪城とか、あんな
感じの……」

私とも聞いた世界ではないのは確かだ。どこからどう見ても、あ
れは戦国時代の光景だった。

「さすがに記憶はなくても、そんな時代に住んでいないのはわかる
わ」

独り言を言っつて、またゆっくりと首までお湯につかった。

ドライヤーはバスルームについていた。シャンプーからリンス、
石鹸までもがここにはある。ただし、誰かが使っていた形跡はなく、
すべてが新品だった。

トイレもちやんと使えるし、冷蔵庫に何も入ってないのと、全く
食べ物が無いのだけが不便だったが、あとは生活するには便利など
ころでもあった。

ベッドにまた潜り込み、私は目を閉じた。ここがどこなんだかも、自分が誰なんだかも、誰に追われているのかもわからないというのに、そんな心配や不安よりも今は、ただただ眠りたかった。

きっと、体中が疲れ果て、考えることもしたくないくらいになっているんだ。

そんなことを思っているうちにどうやら、私は深い眠りへと落ちて行ったようだ。

「姫！楓姫！」

まただ。誰かが呼んでいる。ううん、泣き叫んでいる。誰？あなたは誰？楓姫って、私のこと？

「姫！どこにおられるのですか？」

私は「うん」。

「姫~~~~!!!!」

泣き叫ぶその人の声はどんどん、小さくなっていった。

私は自分が泣いていることに、起きてから気がついた。頬が涙で濡れている。

「なんの記憶？それともただの夢？ああ、もしかすると前に見た、ドラマか映画かもしれないな」

そんなことを思いながら、ベッドから私は出た。

寝室はカーテンがかけられていたが、そのカーテンとカーテンの隙間から、わずかな光が部屋に入り込んでいた。

「朝？」

カーテンをそっとめくり、外を見てみた。そこには大きな木が何

本が植えられ、あとは小さな庭のようなスペースがあった。庭は綺麗な緑の芝生で敷き詰められている。

トントン。ドアをノックする音がした。彼も起きたのかしら。

「はい」

「起きてる？」

「今起きたの。着替えてから、リビングに行くわ」

「うん、わかった」

その人の声は穏やかで、それだけでもほっとした。なぜ安心するのもわからない。彼がいったい誰で、なんでここにいるのかもわかっていないというのに。

だけど、彼が言うように、彼は私を守るためにここに来てくれたんじゃないかって、そう思えて仕方ないのだ。

昨日の服を着て、髪を簡単に整え、私は部屋を出た。化粧道具もないのだから、ほとんどノーメイクだ。

「おはよう」

リビングに行くと、彼はすごく優しい穏やかな表情で、そう挨拶をしてきた。

「おはよう。昨日、私のこと寝室に運んでくれた？」

「え？ああ。ここで寝るよりも、ベッドのほうが良く寝れるだろうと思って」

「ありがとう。でも、私重かったでしょ？」

「そんなことなかったよ」

その人は優しく微笑んだ。

「ねえ、あなたの名前なんだけど」

「僕の名前？昨日も言ったけど、記憶がないんだ。だから名前も思い出せない」

「ううん。それは私も同じ。ただ、ここでなんて呼んでいいか。2人だけで言い合えるあだ名でもいいの。考えない？」

「そうだね。君とかあなたじゃ、味気ないもんね」

そう言って、彼は考え出した。

「君も僕も、どっからどう見ても、日本人だね」

「日本語上手だしね？」

そう私が言うと、彼はクスって笑った。笑うと目じりが下がり、可愛い印象になるんだわ、この人って。

「そうだ。昨日、変な夢を見たんだ」

「どんな？」

「戦国時代にいた。僕はある姫を守る家来だった。その姫のことをきつと愛していて、その姫が戦に敗れ、城を焼かれてその中で死んでしまうんだ」

え？その夢って。

「僕は最後まで姫を、燃え盛る炎の中で探した。姫の名前は楓姫だった」

やっぱり、同じ夢！

「一回だけ姫の声が聞こえた。小さな声だった。僕の名を呼んだん

だと思う。佐助って言った」

「サスケ？」

「猿飛佐助みたいだね。クス」

その人はまた笑った。笑顔がすごく人懐こくて、ひきこまれた。

「じゃあ、佐助って呼ぶわ」

「君のことは楓って呼べばいいかな」

「…私も同じ夢を見たの」

「え？」

「誰かが姫、楓姫って叫んでいた。辺りは一面、煙だった」

「…同じ夢？」

「それが私たちがいた世界ではないことは確かよね。この服装から見たって、戦国時代に生きていたとは思えないし」

「前世かな」

「え？」

「そついつの、信じる？」

「輪廻転生ってこと？」

「うん」

「……わからない。なにしろ、自分が誰かも思い出せないのに、前世のことまで考えられないもの」

「そつだよね……。でももし、前世があるとしたら、これで君と僕がつながっているのがわかったんじゃないかな」

「え？」

「僕はやっぱり、前世でもここでも、君を守る役目があるんだ」
「……」

「ただ、前世ではどうやら、守りきれなかったみたいだけどね」
その人は寂しそうに微笑んでそう言っていると、ソファーに深く腰掛けた。

「なんでそう思うの？」
私も彼の隣に座った。

「炎の中を探しても、姫を見つけれなかった。燃えた城の残骸の中から、姫の簪だけを僕は見つけた。僕は、守ることができなかった自分を呪った。そしてその簪で喉を突いて、自害した」
「……それも夢で見たの？」

「ああ。泣き叫び、姫のもとへ今行きますって言って、死んでいったよ」

「……」
ゴクン。それじゃ、もし今、私が追われているやつに殺されたら、この人、私を追って死ぬの？

「きっと、そんな前世があるから、今世では守りきる」
「……私を？」
「守り切ってみせるよ」

プワ……。リビングがいきなり、大きな和室になった。
目の前にはなぜか、着物を着ている佐助がいる。そして私も、着物を着ている。ああ、ここ、城の中の一室だ。

「姫……。私は命に代えても、あなたを守ります」

「佐助。どうか私のために、命を粗末にすることだけはしないで」
震える声で私は言った。佐助はそんな私を優しく見つめ、穏やかに微笑んだ。

次の瞬間、またそこはリビングに戻った。

「今の？」

「前世に一瞬、タイムスリップしたのかな」
佐助が私を懐かしそうに見ながら、そう言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6331y/>

最後の輪廻

2011年12月6日00時54分発行